

# 鉢木

観阿弥作

世阿弥とも

前

ワキ 旅僧（最明寺）

ツレ 源左衛門妻

シテ 佐野源左衛門常世

後

ワキ 最明寺入道時頼

ツレワキ 最明寺侍臣

狂言 又其従者

地は 前は上野 後は鎌倉

「行方さだめぬ道なれば。く。来し方も何くならまし。」

「是は一处不住の沙門にて候。我此ほどは信濃の国に候ひしが。余りに雪深くなり候ふほどに。まづ此度は鎌倉に上り。春になり修行に出でばやと思ひ候。」

「信濃なる。浅間の嶽に立つ煙。く。遠近人の袖寒く。吹くや嵐の大井山。捨つる身になき友の里。」

今ぞ浮世を離坂。墨の衣の碓氷川。下す筏の板鼻や。佐野の渡に着きにけり。く。

「急ぎ候ふほどに。上野の国佐野のわたりに着きて

候。あら笑止や又雪の降り来りて候。此所に宿を借らばやと思ひ候。いかに此屋の内へ案内申し候。

ツレ「誰にてわたり候ふぞ。」

ワキ「是は修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。」

ツレ「安き御事にて候へども。主の御留守にて候ふほど

に。御宿は叶ひ候ふまじ。

ワキ「さらば御帰りまでは是に待ち申さうずるにて候。

ツレ「それはともかくもにて候。わらは、外面へ出でむかひ。此由を申さばやと思ひ候。

シテ「あゝ降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候ふらん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散乱し。人は鶴氅を着て立つて徘徊すと言へり。されば今ふる雪も。もと見し雪にかはらねども。我は鶴氅を

着て立つて徘徊すべき。

カ、ル「袂も朽ちて袖せばき。細布衣陸奥の。今日の寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。あら思ひよらずや。此大雪に何とて是にたゝずみて御入り候ふぞ。

ツレ「さん候修行者の御入り候ふが。一夜の御宿と仰せ候ふほどに。御留守の由申して候へば。御帰りまで御待ちあらうずるよし仰せ候ふほどに。是まで

参りて候。

シテ「さてその修行者はいつくに渡り候ふぞ。

ツレ「あれに御入り候。

ワキ「我等が事にて候。いまだ日は高く候へども。余りの大雪にて前後を忘れて候ふほどに。一夜の宿を御かし候へ。

シテ「やすき御事にて候へども。あまりに見苦しく候ふほどに。御宿は叶ひ候ふまじ。

ワキ「いや／＼見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御かし候へ。

シテ「留め申したくは候へども。我等夫婦さへ住みかねたる体にて候ふほどに。中々御宿は思ひもよらぬ事にて候。是より十八町あなたに。山本の里とてよき泊りの候。日の暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。

ワキ「さてはしかと御借しあるまじいにて候ふか。

シテ「御痛はしくは存じ候へども。御宿は参らせがたう候。

ワキ「あら曲もなや。よしなき人を待ち申して候ふ物かな。

ツレ「あさましや我等かやうに衰ふるも。前世の戒行つたなき故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ。後の世の便ともなるべけれ。然るべくは御宿を。参らせ給ひ候へ。

シテ詞「さやうに思しめさば。何とて以前には承り候はぬぞ。いや此大雪に遠くは御出で候ふまじ。某追つ付き留め申し候ふべし。なふく旅人御宿参らせうなふ。余りの大雪に申す事も聞えぬげに候ふ。痛はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ。今ふる雪に行方を失ひ。一所にたゝずみて。袖なる雪を打ち払ひ打ち払ひし給ふ気色。古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うちはらふ陰もなし。佐野

の渡りの雪の夕暮。かやうによみしは大和路や。  
三輪が崎なる佐野の渡り。

地

「是は東路の。佐野の渡りの雪の暮に。迷ひつかれ  
給はんより。見苦しく候へど。一夜は泊り給へや。

上歌

「げに是も旅の宿。く。仮初ながら値遇の縁。一  
樹の陰のやどりも。此世ならぬ契なり。それは雨  
の木陰。是は雪の軒旧りて。憂き寝ながらの草枕。  
夢より霜や結ぶらん。夢より霜やむすぶらん。

シテ詞

「いかに申し候。お宿は申して候へども。何にても  
候へ参らせうずる物もなく候ふはいかに。

ツレ

「折節これに粟の飯の候ふほどに。苦しからずは参  
らせられ候へ。

シテ

「さらば其由申し候ふべし。いかに申し候。御宿を  
ば参らせて候へども。何にても参らせうずる物も  
なく候。折節これに粟の飯のあるよし申し候。苦  
しからずは聞し召され候へ。

ワキ詞 「それこそ日本一の事にて候ふ賜はり候へ。」

シテ 「なふ聞し召されうずると仰せ候。急いで参らせられ候へ。」

ツレ 「心得申し候ふ。」

シテ 「総じて此粟と申す物は。古へ世にありし時は。歌に読み詩に作りたるをこそ承りて候ふに。今は此粟をもつて身命を継ぎ候。げにや盧生が見し栄花の夢は五十年。其邯鄲の仮枕。一炊の夢のさめし

も。粟飯かしく程ぞかし。あはれやげに我も打ちも寐て。夢にも昔を見るならば。慰む事もあるべきに。なふ御覧ぜよかほどまで。

地 「住みうかれたる故郷の。松風さむき夜もすがら。寐られねば夢も見ず。何思出のあるべき。」

シテ詞 「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあて参らせ候ふべき。や。思ひ出だしたる事の候。鉢の木を持ちて候。之を切り火に焚

いてあて申し候ふべし。

ワキ「げに／＼鉢の木の候ふよ。

シテ「さん候某世にありし時は。鉢の木に好き数多木を集め持ちて候ひしを。かやうの体に罷りなり。いや／＼木ずきも無用と存じ。皆人に参らせて候ふさりながら。今も梅桜松を持ちて候。あの雪もちたる木にて候。某が秘蔵にて候へども。今夜のおもてなしに。之を火に焚きあて申さうずるにて候。

ワキ「いや／＼是は思ひもよらぬ事にて候。御心ざしはありがたう候へども。自然又お事世に出で給はん時の御慰にて候ふ間。中々思ひもよらず候。

シテ「いやとても此身は埋木の。花咲く世に逢はん事。今此身にてはあひがたし。

ツレ「唯いたづらなる鉢の木を。御身の為に焚くならば。シテ「是ぞ誠に難行の。法の薪と思召せ。

ツレ「しかも此程雪ふりて。



シテ「仙人に仕へし雪山の薪。

ツレ「かくこそあらめ。

シテ「我も身を。

地「捨人の為めの鉢の木。切るとてもよしや惜しから  
じと。雪打ち払ひて。見れば面白やいかにせん。  
先冬木より咲きそむる。窓の梅の北面は。雪封じ  
て寒きにも。異木よりまづ先だてば。梅を切りや  
初むべき。見じといふ。人こそうけれ山里の。折

りかけ垣の梅をだに。情なしと惜しみしに。今  
更薪になすべしと。かねて思ひきや。桜を見れば  
春ごとに。花すこし遅ければ。此木やわぶると。  
心をつくし育てしに。今は我のみわびて住む。家  
桜きりくべて。緋桜になすぞ悲しき。

シテ「さて松はさしもげに。

地「枝をため葉をすかして。かゝりあれと植ゑ置きし。  
其かひ今は嵐吹く。松はもとより煙にて。薪とな

るもことわりや。切りくべて今ぞ御垣守。衛士の  
焚く火はお為めなり。よくよりてあたり給へや。

ワキ詞

「近頃よき火にあたり寒さを忘れて候。

シテ

「御出でにより我等も火にあたりて候。

ワキ

「いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ふぞ承  
りたく候。

シテ

「いや某は名字もなき者にて候。

ワキ

「何と仰せ候ふとも。唯人とは見え給はず候。自然

の時の為にて候。なにの苦しう候ふべき。御名字  
を承り候ふべし。

シテ

「此上は何をか包み候ふべき。是こそ佐野の源左衛  
門の尉常世がなれる果にて候。

ワキ

「それは何とてかやうの散々の体にはなり給ひて候ふ  
ぞ。

シテ

「其事にて候。一族ともに押領せられて。かやうの  
身となりて候。

ワキ「なふそれは何とて鎌倉へ御上り候ひて。其御沙汰は候はぬぞ。」

シテ「運の尽くる所は。最明寺殿さへ修行に御出で候ふ上は候。かやうにおちぶれては候へども。御覧候へ是に物の具一領長刀一えだ。又あれに馬をも一疋つないで持ちて候。是は只今にてもあれ鎌倉に御大事あらば。ちぎれたりとも此具足取つて投げかけ。錆びたりとも長刀を持ち。痩せたりともあの

馬に乗り。一番に馳せ参り着到に付き。さて合戦始まらば。

地「敵大勢ありとても。く。一番に割つて入り。思ふ敵と寄りあひ打ちあひて。死なん此身の。此まゝならばいたづらに。飢につかれて死なん命。なんぼう無念の事ぞふぞ。」

ロングワキ「よしや身の。かくては果てし只頼め。我世の中にあらんほど。又こそ参り候はめ。暇申していづる

なり。

シテ、ツレ 「名残をしの御事や。始めはつゝむ我宿の。さも見  
苦しく候へど。しばしは留まり給へや。

ワキ 「留まる名残のまゝならば。さて幾たびか雪の日の。

シテ、ツレ 「空さへ寒き此暮に。

ワキ 「いづくに宿を狩衣。

シテ、ツレ 「今日ばかり留まり給へや。

ワキ 「名残は宿にとまれども。いとま申して。

シテ、ツレ 「御出でか。

ワキ 「さらばよ常世。

シテ、ツレ 「また御入り。

地 「自然鎌倉に。御上りあらば御尋ねあれ。けうが  
る法師なり。かひぐしくはなけれども。公方の  
縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなど。いひ  
すてゝ出船の。共に名残や惜しむらん。く。 (中入)

後シテ詞 「いかにあれなる旅人。鎌倉へ勢の上るといふは誠

か。何おびたゝしく上るさぞあるらん。東八個国の大名小名。思ひくの鎌倉入り。さぞ見事にて候ふらん。白金物打つたる糸毛の具足に。金銀をのべたる太刀かたな。飼ひに飼うたる馬に乗り。乗替中間きらびやかに。うちつれく上る中に。常世が常にかはりたる。馬物具や打物の。物其ものにあらざる気色。さぞ笑ふらんさりながら。所存は誰にも劣るまじと。心ばかりは勇めども。勇

みかねたる瘦馬の。あら道おそや。

地「急げども。く。弱きに弱き柳の糸の。

シテ「よれによれたる瘦馬なれば。

地「打てどもあふれども。先へは進まぬ足弱車の。乗り力なければ追ひかけたり。

ワキ詞「いかに誰かある。

ツレワキ「御前に候。

ワキ「国々の軍勢どもは皆々来りてあるか。

ツレワキ 「さん候悉く参りて候。

ワキ 「其諸軍勢の中に。いかにもちぎれたる具足を着。

さびたる長刀を持ち。瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いで此方へ来れと申し候へ。

ツレワキ 「畏つて候。いかに誰かある。

狂言 「御前に候。

ツレワキ 「君よりの御錠には。諸軍勢の中にちぎれたる具足

を着。さびたる長刀を持ち。瘦せたる馬を自身ひかへたる武者有るべし。急いで尋ねて御前へ参れとの御事にて候。

狂言 「畏つて候。いかに申し候。

シテ 「何事にて候ふぞ。

狂言 「急いで御前へ御参り候へ。

シテ 「何と某に御前へ参れと候ふや。

狂言 「中中の事。

シテ「あら思ひよらずや。定めて人たがへにて候ふべし。

狂言

「いや／＼其方の事にて候。其子細は。諸軍勢の中に。いかにも見苦しき武者をつれて参れとの御事にて候ふが。見申せば其方ほど見苦しき武者も候はぬ程に。さて申し候。急いで御参り候へ。

シテ

「何とたとへば諸軍勢の中に。いかにも見苦しき武者に参れと候ふや。

狂言

「中々の事。

シテ

「さては某が事にて候ふべし。畏つたると御申し候へ。

狂言

「心得申し候。

シテ

「げに／＼是も心得たり。某が敵人謀叛人と申し上げ。御前に召し出だされ頭を刎ねられん為めな。よし／＼それも力なし。いで／＼御前に参らんと。大床さして見渡せば。

地

「今度の早打に。／＼。上りあつまる兵。きら星の

如く並み居たり。さて御前には諸侍。其外数人並み居つゝ。目を引き指をさし。笑ひあへる其中に。

シテ「横縫のちぎれたる。」

地「古腹巻に錆長刀。やう／＼に横たへ。わるびれたる気色もなく。参りて御前にかしこまる。」

ワキ詞「やあ如何にあれなるは佐野の源左衛門の尉常世か。是こそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ見忘れてあるか。いで汝佐野にて申せしよな。今に

てもあれ鎌倉に御大事あるならば。ちぎれたりとも其具足取つて投げ懸け。錆びたりとも其長刀を持ち。痩せたりともあの馬に乗り。一番に馳せ参すべきよし申しつる。言葉の末を違へずして。参りたるこそ神妙なれ。先々今度の勢づかひ。全く余の義にあらず。常世が言葉の末。誠か偽か知らん為めなり。又当参の人々も。訴訟あらば申すべき。理非によつて其沙汰いたすべき処なり。先々



沙汰の始めには。常世が本領佐野の庄。三十余郷  
かへし与ふる所なり。又何よりも切なりしは。大  
雪ふつて寒かりしに。秘蔵せし鉢の木を切り。火  
に焚きあてし志をば。いつの世にかは忘るべき。  
いで其時の鉢の木は。梅桜松にてありしよな。其  
返報に。加賀に梅田。越中に桜井上野に松枝。合  
はせて三箇の庄。子々孫々に至るまで。相違あら  
ざる自筆の状。安堵に取り添へ給ひければ。

シテ「常世は之を賜はりて。

地「常世は之を賜はりて。三度頂戴仕り。これ見給へ  
や人々よ。始め笑ひしともがらも。是ほどの御氣  
色。さぞ羨ましかるらん。

地「さて国々の諸軍勢。皆御いとま賜はり。古郷へと  
てぞ帰りける。

シテ「其中に常世は。

地「其中に常世は。よろこびの眉を開きつゝ。今こそ

勇め此馬に。うちのりて上野や。佐野の舟橋とり  
はなれし。本領に安堵して。帰るぞうれしかりけ  
る。く。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈第一輯』大和田建樹著